

## 夢十夜

夏目漱石

### 第三夜

こんな夢を見た。

六つになる子供を負<sup>おぶ</sup>つてる。たしかに自分の子である。ただ不思議な事にはいつの間にか眼<sup>つぶ</sup>が潰れて、青坊主<sup>あおぼうず</sup>になつてゐる。自分が御前の眼はいつ潰れたのかいと聞くと、なに昔からさと答えた。声は子供の声に相違ないが、言葉つきはまるで大人である。しかも対等<sup>たいとう</sup>だ。

左右は青田<sup>あわた</sup>である。路<sup>みち</sup>は細い。鷲<sup>ささぎ</sup>の影が時々闇<sup>やみ</sup>に差す。

「田圃<sup>たんぼ</sup>へかかったね」と背中で云つた。

「どうして解る」と顔を後ろ<sup>うしろ</sup>へ振り向けるようにして聞いたら、

「だつて鷲<sup>ささぎ</sup>が鳴くじゃないか」と答えた。

すると鷲<sup>ささぎ</sup>がはたして二声ほど鳴いた。

自分は我子ながら少し怖<sup>こわ</sup>くなつた。こんなものを背負<sup>しよ</sup>つていては、この先どうなるか分らない。どこか打遣<sup>うち</sup>やる所はなかるうかと向うを見ると闇の中に大きな森が見えた。あすこならばと考え出す途端<sup>とたん</sup>に、背中で、

「ふふん」と云う声をした。

「何を笑うんだ」

子供は返事をしなかつた。ただ

「御父<sup>おとう</sup>さん、重いかい」と聞いた。

「重かあない」と答えると